

二年目の歩み

広島芸術学研究会昭和六十三年年度活動報告

八 田 典 子

この一年間、広島県内では美術館や音楽ホールなどの大きな文化施設のオープンが相次いだ。それに伴い当然、関係諸事象の変化、新しい人的交流も生まれる。新しい時代を迎えつつある広島の文化状況の中で、広島芸術学研究会の存在もいよいよ重みを増す昨今である。

本会の今年度の活動は、二年目の落ち着きと力強さを感じさせるものであった。会員は現在八十九名。遠地より来広の新しい顔が目立つ。大会及び四回開かれた例会において、会員による研究発表七回、パネルディスカッション一回、特別観賞会一回が行われた他、展覧会の特別鑑賞会も一回開催された。「広島芸術学研究会報」（以下「会報」と略す）も第八号までを発行。

以下、折々の雑感とともに、この一年の歩みを記す。

▼昭和六十三年七月二十三日（土）

午後二時から五時まで、広島県立美術館講堂にて第二回総会及び大会が開催された。総会では、金田替代委員のあいさつの後、六十二年度

事業報告並びに決算報告が行われ、続いて、六十三年度事業計画並びに予算、会費規定の改正が審議決定された。引き続き開かれた大会では、野村久之氏（比治山女子短期大学・芸術学）、原田宏司氏（広島大学・音楽学）、杉本俊多氏（広島大学・建築学）の三氏が、それぞれ「メキシコ壁画運動の影で〜女性画家フリーダ・カロの作品と生涯〜」「ハノーバー宮廷の音楽的周辺」「産業奨励館（原爆ドーム）の建築美について」と題して日ごろの研究成果を発表した。野村氏は、メキシコ壁画運動の代表的画家リヴェラの妻でもあったカロの画業と生涯をスライドを交えながら紹介。日本ではまだあまり知られていない一人の個性豊かな創作者の存在を強く印象つけた。原田氏は、宮廷音楽形成の有り様を、広島市と姉妹都市縁組を結んでもいる西ドイツ・ハノーバー市のバロック時代に着目して考察、また杉本氏は、現在「原爆ドーム」として知られる「広島県産業奨励館」のデザインのルーツを、設計者ヤン・レットルの足跡を追いながら、「セセッション」をはじめとするウィーン派の建築様式に求め、ともに遠くヨーロッパ文化の華やきに思いはせる発表となった。

あいにくの雨にもかかわらず約八十名が出席。会場では年報『藝術研究』創刊号も配付された。また、五時十分から同美術館グリルで開かれた懇親会には約三十名が参加、和やかな歓談の一時を過ごした。

▼九月十五日(木)

「会報」第五号発行。掲載記事は、第二回大会での研究発表要旨の他、「『広島芸術学研究会』の一年」(金田晋)、「一年が過ぎて」(伊藤笙子)等。

▼十月八日(土)

午後三時二十分から四時三十分まで、山県郡千代田町の古保利薬師堂にて第五回例会が開かれる。参加者約三十名。マイクロバスと乗用車に分乗しての遠出となった。まず、薬師堂に隣接する集会所で松本真氏(広島修道大学・芸術学)が「古保利薬師堂の諸仏」と題し研究発表。その後、一同堂内に入り、実際に仏像を鑑賞する。天平時代から貞観時代を経て、藤原時代に至る過渡期的特色を示す貴重なものという、細部表現の具体例を挙げての松本氏の説明を思い返しながら、十二軀の古仏に見入る。千代田の秋は既に深く、冴々とした大気に身の引き締まる思いがした。

▼十一月十一日(金)

午後五時三十分から六時三十分まで、広島県立美術館にて開催中の

「曙光——青春の光と闇」展の特別鑑賞会を開く。美術館の格別な配慮をいただいたの一夕。参加者約三十名、大井健地学芸員の解説に耳を傾けながら、力込もる曙光作品の数々を熱心に鑑賞した。

▼十一月十五日(火)

「会報」第六号発行。第五回例会での研究発表要旨の他、「アッシシの思い出」(幣原映智)、「第二回『現代音楽プロジェクト』88広島・東京」の報告」(伴谷晃二)等、掲載。

▼十二月三日(土)

午後二時三十分から五時まで、広島大学総合科学部三〇五号視聴覚教室にて、第六回例会が開かれる。統一テーマは「近世絵画における地域性」。黒川修一氏(広島県立美術館・日本絵画史)と永田雄次郎氏(広島大学・日本美術史)が、それぞれ「江戸時代の唐絵」、「地域性と美術」と題し研究発表を行った。出席者約六十名。黒川氏は浅野藩に仕えた岡岷山の画業を通し、また、永田氏は前任地鹿児島(薩摩)の中世から近代に至る美術状況を示して、テーマを追求した。来広後、まだ日が浅いという両氏だが、それだけに、広島の文化的基盤に対する新たな興味を喚起する発表であったと思う。

▼平成元年二月十五日(水)

「会報」第七号発行。第六回例会での研究発表要旨の他、「早春随想」

(八田典子)、「芸術作品の最良の手本があることは研究方法の妨げになる」という説について」(大井健地)等、掲載。

▼三月十一日(土)

午後二時から五時まで、ひろしま美術館講堂にて第七回例会が開かれた。テーマは「語り」。まず青木孝夫氏(広島大学・演劇美学)が「語りの美学」と題して近松門左衛門をテキストに研究発表。その後、金田晋氏の司会で、青木氏、入野忠芳氏(画家)、井野口慧子氏(詩人)が活発にパネルディスカッションを展開、研究者と実作者それぞれの立場から「語り」の諸相が興味深く呈示された。中でも井野口氏による絵本『百万回生きた猫』(佐野洋子作)と自作の詩「深い海の魚」の朗読は、「語り」の魅力をストレートに伝え感銘深かった。出席者約四十名。

▼五月十日(水)

「会報」第八号発行。掲載記事は、第七回例会の報告の他、「展覧会雑感 マレーヴィチ、フェルカーデ、ゴッガン、ティンゲリー」(因府寺司)等。

▼五月二十七日(土)

午後二時から五時三十分まで、第八回例会「広島市現代美術館特別観賞会」が開かれた。日本初の公立現代美術館として五月三日にオープンした広島市現代美術館を訪ね、まず、ミュージアム・スタジオにて南條

史生氏(美術評論家)の講演「ヨーロッパの現代美術」を聴講。その後、南寫宏・出原均両学芸員の案内で開館記念展の「シュブレンゲル美術館名品展」「広島・ヒロシマ・HIROSHIMA」とともに、それ自体が現代美術と言われる同館を観賞した。新緑に映える新しい美の殿堂での心弾む例会であった。参加者約七十名。

以上が本研究会の今年度の活動である。

この夏で早くも三年目を迎える広島芸術学研究会。会員相互、そして会全体として、より創意に満ちた、生氣あふれる活動を期待したい。

(はった・のりこ 広島県民文化センター)